

## 比較教育社会学コース 大学院説明会 Q&A

5月29日(水)のコース別説明会でご質問いただいた内容のうち、こちらで回答できなかった内容について、Q&Aの形で回答させていただきます。出願の参考にしてください。

Q 指導教員のゼミ選びの際、何か選考がありますか？

A 本人の希望が優先されます。

Q 外部から(内部の修士を通らず)博士課程に入る、というケースは非常にまれということでしょうか？

A 例年受験者自体が多くありませんが、外部からの博士課程入学者は過去にもおられます。内部か外部かというよりは、当コース修士修了と同等の専門的な研究水準を示していること、および博士課程3年間の研究によって博士号を取得できる見通しがあることが基準となります。

Q 過去に、社会人生活と修士または博士の学生生活を両立された方はどの程度いらっしゃいますでしょうか。

A 数値的には把握しておりませんが、両立されている方はおられます。ただし、当日の教員の説明にもありましたとおり、個別の事情(たとえば職場の環境など)によっては仕事と研究の両立にかなり苦労されている場合もあります。

Q 修士卒業後の進路として、小中高の教員になる方はいらっしゃいますか？

A 小学校はいないと思いますが、中高の教員になった方はおられます。

Q 研究したい内容がマッチしているかより具体的にお伺いする機会として、個別にアポ取得の上訪問させていただくことは可能でしょうか。

A 個別の研究内容の適合性は、教員の研究や教育内容などの情報から各自でご判断いただきたいと思います。

Q 比教社の院(修士博士ともに)に在学中もしくはその後の進路として、海外の大学院に留学される例はありますか。

A あります。以前より増えている印象もあります。

Q 修士課程の外国人留学生の人数はどれくらいあるのでしょうか。

A 人数が決まっているわけではありませんが、各学年に2~3人程度は在籍しています。

Q 私は学部時代から専攻を変えることになるのですが、研究計画書には教育社会学とは別分野の卒論のことを書いても大丈夫なのでしょうか。

A 教育学研究科 HP の「大学院入試 Q&A」

<https://www.p.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2024/04/11202404%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E9%99%A2%E5%85%A5%E8%A9%A6Q%EF%BC%86A.pdf>

に関連する指摘がありますのでご参照ください。

Q 最近社会人歴がある院生は少ないのでしょうか。

A そのような集計をしたことがありませんので正確な数値はわかりませんが、各学年に1～2人ぐらいいるイメージです。

Q 外国の修士課程を通じて、博士課程に入ることは可能でしょうか。また、博士課程の外国人留学生の人数はどれくらいあるのでしょうか。

A 基本的には可能ですが、大学や国によって制度が異なることもあるため、学生支援チームにご確認ください。また、説明会でもお伝えした通り、専門分野の適合性には十分ご注意ください。特に博士課程は専門性をより求められるとお考え下さい。博士課程の外国人留学生の人数は、平均して各学年に1名程度です。

Q 過去問は海外からオンラインで購入できますか？

A 過去問の取り扱いについては、教育学研究科 HP の「大学院入試 Q&A」にも記載がありますので、まずはそちらをご覧ください。

Q 博士後期課程について、社会人かつ都外在住という環境での修学は可能でしょうか。

A ケースバイケースですので、こちらでは判断がつきかねます。ただし、説明会時にも教員から説明がありました通り、オンラインの授業や長期履修制度などを組み合わせて大学に来る日数を減らす工夫の余地は多少あると思います。

Q 先生へのアポイントの期限等ございましたらご教示ください。

A 教育学研究科でルールが決まっております。「原則として入学願書受付開始前まで」であり、面談をするかどうかは各教員の判断になります。教育学研究科 HP の「大学院入試 Q&A」をご覧ください。

Q 本コースにおいて、IB の教職が取れるのでしょうか。

A 本コースは IB 教員認定には対応しておりません。

Q 夏休みに研究室訪問（修士課程）をすることができますでしょうか。

A 教育学研究科でルールが決まっております。「原則として入学願書受付開始前まで」であり、面談をするかどうかは各教員の判断になります。

Q 不登校研究をされている先生はいらっしゃいますか。

A 不登校についてそれ自体をメインに研究している教員はいませんが、大学院生で不登校に関する研究をしていたケースはあります。